

## 宣 誓

本日は、お忙しい中、新入職員歓迎式を開催していただき、誠にありがとうございます。  
また、小口理事長をはじめ、多くの皆様にご臨席賜りましたことを心より御礼申し上げます。

東日本大震災から早くも 14 年が経過し、今日では柏崎刈羽原発の再稼働に向けた議論が進む中、原子力を取り巻く環境は日々変化しています。昨年発生した能登半島地震は、エネルギー政策の在り方のみならず、「安全とは何か」「安心とは何か」という根源的な問いを改めて私たちに突きつけました。ここにいる一人一人も当事者としてそうであるように、福島県出身の私自身も、〈福島〉や〈原子力〉という言葉に向けられる社会のまなざしの変遷を、身をもって感じてまいりました。

原子力は単なる技術ではなく、社会の価値観とともに変容し続ける存在として、常に揺れ動く評価に晒され、科学的事実だけでは説明しきれない複雑さを孕んできたはずです。そして今、政府が掲げる 2050 年脱炭素社会の実現に向け、原子力が社会とどのように関わり、その中で何を果たしていくのか——この問いに、私たちは向き合い続けなければなりません。

それは、技術の発展だけでなく、組織の在り方にも関わる問題です。昨年導入された新人事制度では、「実行・意思疎通・考案 (ECT)」の 3 つが重視され、個々の主体性がより問われる仕組みへ変わりつつあると伺っています。

私は事務職員として、社会や組織全体を見渡し、自らの役割を深く考え、行動していきます。研究者・技術者の皆様が真摯に取り組み、生み出した成果が、社会により良い形で還元されるよう、運営基盤として支え、課題を見出し、改善へとつなげる視点を持ち続けること。それこそが、私たち事務職員の責務であり、私自身の貢献の形であると考えます。従来、事務部門は研究者や技術者を支える存在と捉えられてきました。しかし、小口理事長が仰るように、事務部門こそ組織全体を俯瞰し、事業の可能性を引き出す役割を担う必要があるはずです。

いま、私たちは、歴史を形づくる岐路に立っていると言えます。原子力の歴史を振り返ると、一つの評価基準に拘泥することの危うさを感じずにはいられません。そして、私はこれまで目にしてきた、悲しみや悔しさを滲ませた人々の表情を、決して忘れることもできません。だからこそ、「公正さ」とは何かを問い続け、行動し続けることが求められているのではないのでしょうか。

価値や評価を固定せず、宙吊りにしたまま思考し続けること。それを恐れず、多様な価値を見出すしなやかさを持つこと。科学への期待と不安の間で揺れ動きながらも、私たちは確固たる答えを急ぐのではなく、「いかに考え続けられるか」が問われています。そして、社会情勢や科学技術の発展と協調しながら、組織内外で知を共有し、価値の循環を生み出していくことにこそ、私たちが果たしうる社会的貢献の一步があると信じます。

本日より、私たちは原子力機構の一員となりますが、組織の責任を自覚し、主体的に学び続けてまいります。未熟ではありますが、先輩職員の皆様の背中を追いながら、自ら課題を見つけ、目標を定め、研鑽を積んでまいりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、『『ニュークリア×リニューアブル』で拓く新しい未来』の実現に向けて貢献することをここに誓います。

令和7年4月1日  
新入職員代表 半沢 咲